ジャーヒリーヤ時代の暦法
——巡礼・交易・神聖月との関わりから——

The Calendar in the Jāhiliya Period:
Pilgrimage, Trade, and Sacred Month

医 王 秀 行^{*}
Io Hideyuki

ABSTRACT In the Jāhiliya Period, a pilgrimage festival with an annual market was held at a convenient season of the year. Observing the difference between the lunar and the solar year, they intercalated a month every several years. It has been said that this system was taken from the Jews. The Banū Kināna were charged with *Nasi'* (intercalation) and adjusted the calendar.

Abraha, who invaded Makka in the Year of the Elephant, aimed to divert the Arab pilgrimage to the church he himself had constructed in Yemen. But there were strong protests against his plan, particularly by the Kinānite who controlled the order of the Arab pilgrimage cycle in the Arabian peninsula.

According to their calendar, in a normal year, the first two months after Dhu 'l-Ḥijja were Ṣafar I and Ṣafar II, and in a leap year, the intercalary month, al-Muḥarram, came first, followed by Ṣafar I and Ṣafar II. Ṣafar I in a normal year and al-Muḥarram both belonged to the sacred months, so that the safety of the pilgrims moving to another sanctuary was guaranteed. Therefore, in a leap year and a normal year, there were four sacred months.

Though this was exceptional, they postponed the sanctity of a month when the markets were invaded, or war broke out between Arab tribes, and so the festival could not be held as normal. Mainly the Kinānite took part in the war of Fijār which occurred near the 'Ukāz market for several years. Therefore, it was likely that the sacred month was postponed exceptionally.

* 東京女学館短期大学助教授

Associate Professor, Tokyo Jogakkan Junior College

はじめに

ヒジュラ暦は純粋な太陰暦として知られているが、太陽暦との調節をせず、特定の月と季節が一致せずに毎年ずれていく形の暦は、世界史的に見ても珍しい部類に入ると言える。しかし、この純粋な太陰暦の導入は預言者ムハンマドの晩年に出されたコーランの啓示が基になっており、それ以前は、ヒジュラの実施から預言者の晩年に至る10年間を含め、太陽暦との調節を行う太陰太陽暦がアラビア半島では一般に用いられていたと考えられる。預言者ムハンマドは、正確に運用するには複雑な計算を要する従来の暦を廃止し、あえて純粋な太陰暦を採用したのであるが、これには半島の伝統的な巡礼・交易システムを一変させる深い意図が込められていた。このことは従来あまり議論されてはおらず、したがって、イスラムの暦は他の暦に比べるとアラブ部族民の慣習を残したままの、より原始的、あるいはより素朴な暦であるというような印象が残ったままである。本稿の目的は、ジャーヒリーヤ時代から預言者の晩年に至るまで、季節に順応した形の巡礼・交易活動を活発に行ってきたクライシュ族などのアラブ部族の活動を知り、預言者が関わった種々の出来事を季節との関連において理解するための一助となすことにある。

I. ジャーヒリーヤ時代のナシー（暦の調整）について

地球の公転周期が365.242日であることから、グレゴリオ暦をはじめとする太陽暦では365日のカレンダーに4年に一度閏日を入れるなどして調整を行うことは周知のことである。一方、太陰暦は月の公転周期が29.531日であるため、1年12ヶ月とした場合、354.367日から成り、太陽暦との差は、約11日となる。端的に言えば、太陰太陽暦とはこの約11日のずれを調整する暦であると言える。古くから太陰太陽暦を用い、ジャーヒリーヤ時代の暦との関連が指摘されてきたのがユダヤ暦である。これはバビロニア暦を基礎に発展した太陰太陽暦であり、太陽暦とのずれを調整するため19年に7度の閏月を設けること、春分をもって年始とすることなどがバビロニア暦に同じであり、月名も酷似している。一説には2世紀頃に確立したとされる複雑に計算されたカレンダーを使用し、アラビア半島でみられたような新月の観察による暦の確定は過去のものとなつていた。⁽¹⁾ また、春分後の満月の日にあたるニサン月15日を過ぎ越しの祭として祝

い、この日が安息日に重ならないようにするなど、ユダヤ教独自の様々な工夫がなされていた。その他の地域に目を移せば、ササン朝ペルシアが独自の太陽暦を持った他、⁽²⁾321年のニケーア公会議以降、3月21日を春分としたユリウス暦やその他の教会暦（コプト、シリア、アビシニア）など、アラビア半島を取り巻く環境は、太陽暦が優勢であり、太陰太陽暦のユダヤ暦も含め、いずれも宗教行事が1年の特定の季節にあたり、雑多人々を含む巡礼・交易がなされ⁽³⁾た。地中海沿岸地域や、アビシニア、ペルシアなどと交易をし、ユダヤ教徒・キリスト教徒から様々な宗教知識を得ていたアラブがこれらの暦に無関心であったわけではない。

ヒジュラ暦の月名は、ジャーヒリーヤ時代にあっても少なくともヒジャーズ地域ではほとんどそのまま使われていたと思われるが、⁽⁴⁾ラマダーンが酷暑を、⁽⁵⁾ラビーウが新緑、春を表わすなど、本来、月と季節は一致していた。アラビア半島にあって、閏月を挿入したり、神聖月を設定したりする暦の調整をナシー *nāsī'* と呼び、これを扱う者がナーシー *nāsi'*（複数：ニサーア *nisā'a*）、ムンシー *munsī'* であるが、史料ではナシーが職務名（カーディーのような）として出てくることもある。⁽⁶⁾タバリーのタフシールによれば、語根の NS' は増加、延長などの意味を持ち、（寿命を）延ばす、（ラクダの歩みを）速めるなどの用例がある他、⁽⁷⁾水を加えたミルク *nāsī'*、子供を孕んだ女性 *nasū'*、などの派生語がある。ナシーの職にはキナーナ族が世襲でこの役職に就き、彼らはカランマス *al-qalammas*（複数：カラーミス）という称号を持っていた。⁽⁸⁾最後のカランマス、アブー・スマーマはイスラムに帰依したが、それ以前、40年間この職にあったという。⁽⁹⁾キナーナはクライシュの曾祖父にあたり、ヒジャーズで勢力のあった部族である。ウカーズのスーク（ズー・ルカアダ月の初日から20日間）の次に設営されたマジャンナのスーク（ズー・ルカアダ月の残りの10日間）を管理していたことが知られ、⁽¹⁰⁾クライシュと共にヒジャーズの3女神のひとつウッザーを有し、⁽¹¹⁾ミルカーン・ブン・キナーナ族はジグダにあった偶像サードを有していた。偶像、スークの所有、管理については時代により異動があるが、ともかく、キナーナ族はヒジャーズ一円の聖域における巡礼行事にあって、他の諸部族と共に重要な役割を担っていたのである。

アラビア半島は孤立した地域ではなく、周辺地域と盛んに交易を行っていたことから、ナシーは必要とされたわけであるが、それ以上に重要な背景が存在

する。かつて、筆者は、ジャーヒリーヤ時代においてアラビア半島各地に特定の月に開催されるスーク（年市）が存在し、それが偶像神に関わる巡礼祭とセットになっていたと指摘した。⁽¹²⁾ ウカーズなどの年市とヒジャーズ地域の聖域群にみられる関係が半島各地に存在したのであり、春はヒジャーズ地域、夏は北部のシリアに近いドゥマ・アルジャンダル、秋にペルシア湾岸、冬にイエメンというサイクルが預言者ムハンマドの時代にはすでに存在していた。神聖月はおよそそのサイクルで各地域に設定され、内陸のアラブ遊牧民の安全保障イラーフを得た隊商が往来した。メッカはヒジャーズの一巡礼地として機能していたのであり、ヒジャーズ地方にはメッカのみならずあまたの都市、そして偶像が存在し、クライシュのみならず、あらゆるアラブ部族が地域の巡礼祭に関わっていたのである。このような、ジャーヒリーヤ時代のアラブの交流を維持していくために必要とされたのがナシーであり、太陰暦と太陽暦のずれをなくし、特定の季節に円滑に巡礼祭を開催するための職務であった。

象の年（預言者ムハンマドが生まれた年とされている）に行われた有名なアブラハのメッカ遠征にはこのナシーが関わっていた。イブン・イスハークから引用すると、

それから、アブラハはサヌアに教会を建てた。……そして、アビシニア王に「王よ、私はあなたのために教会を建立しました。あなた以前の王に、このようなものが建てられたことはありません。わたしは、アラブのハッジをここに变えるまであきらめません」という手紙を書いた。アブラハがアビシニア王にあてた手紙についてアラブが語り合っていた時、ナシー職の1人で、キナーナ族フカйм家に属する男が怒った。……キナーナ族の男は、教会に向かい、そこを汚した。そして出て行き、彼の土地に帰った。アブラハにこの知らせが届き、「だれが、これを行ったのか」と言った。「アルバイト（カーバ）の住民の男で、そのメッカにあるアルバイトにはアラブが巡礼をします。あなたの、アラブの巡礼をここに变えよう、という言葉に怒り、やってきて、ここを汚したのです。……」という返答にアブラハは怒り、誓った。⁽¹³⁾「アルバイトに向かい、それを破壊する」と。

イブン・イスハークの記述がメッカ中心史観に偏っているのは当然であるが、ともかく、アブラハのメッカ遠征のきっかけとなるナシー職のキナーナ族のこの行為は、従来想定されているように、単に巡礼地メッカを守護するという感

情からではなく、半島中の巡礼の周期をつかさどっているナシーの職責から来たものと解してよい。イエメンにおけるユダヤ・キリスト教の浸透により、(あるいは、アブラハ後のササン朝ペルシアの存在も含め)この地域の巡礼パターンが大きく変化していた事も背景としてあろう。アブラハのアラブの巡礼地を変えるという言葉にはもうひとつ注目すべき事柄がある。ヒジャーズ地域の巡礼祭は春であったと述べたが、キリスト教のもっとも重要な宗教行事である復活祭は春分後の満月の次の日曜日にあたることを想起すべきである。つまり、メッカとアブラハの教会の巡礼時期が重なるのである。また、メッカではアブラハムの事蹟にちなんでハニーフと呼ばれる一神教徒やキリスト教徒、ユダヤ教徒までもがメッカに巡礼していた。カーバ建立者としてのアブラハム伝説は⁽¹⁴⁾ジャーヒリーヤ時代のメッカでかなり浸透していたと考えられるのである。また、ユダヤ教徒はターイフにあった偶像ラートの傍らでサウィークという菓子を作っていたと伝えられる。⁽¹⁵⁾ヒジャーズは各種の信仰を許容した聖域群の集合地帯であった。

イブン・ハビーブによれば、アブラハのメッカ遠征軍には南アラブのハスアム族、ハーリス・ブン・カアブ族も含まれていたが、この兩部族は(メッカの)⁽¹⁶⁾聖域を神聖視せず、カーバにも巡礼しなかったとされる。ハーリス・ブン・カアブ族は早くからキリスト教化していたナジュラーンの住民。イブン・カルビーによれば、同部族はナジュラーンにカーバを有し、これを崇めていた。⁽¹⁷⁾ハスアム族は、サヌアとメッカの中間、タバーラの町にあったズー・ルハラサの偶像を守護していた。メッカのカーバがアルカーバ・アルシャーミーヤと呼ばれる一方で、タバーラにあったカーバはアルカーバ・アルヤマニーヤと呼ばれ、⁽¹⁸⁾メッカの偶像フバル同様、矢占いで有名であった。近くにはフバーシャのスークがあって、毎年ラジャブ月に開催された。メッカでも同月は神聖月にあたっており、ある種の宗教行事が行われていたと推測されている。⁽¹⁹⁾つまり、メッカとハスアム族のタバーラは互いに競合する立場にあったと考えられるのである。また、アズラキーによれば、ハスアム族は、タイイ族同様、(メッカ地域の)神聖月を守らなかったと伝えられている。⁽²⁰⁾タイイ族は半島の内陸部に展開し、有力なファルス⁽²⁰⁾の偶像を擁していたが、メッカのクライシュは各地の巡礼地を移動するに際してはタイイ族でなく、半島内陸部に勢力を有していたタミーム族との結びつきを利用していた。ジャーヒリーヤ時代のアラブ部族の秩序は、巡

礼サイクルの維持にいかに関わるかに左右されており、アブラハの遠征はこれに強引に介入し、旧来のシステムを変容させる意図があった。

II. ナシーと閏月・神聖月の関連について

ナシーの廃止については以下のコーランの啓示が下った。

アッラーのもとでの月の数は12ヶ月である。天地の創造の日のアッラーの書では。その中でも4つ（の月）が神聖である。これが正しい信仰である。その間は互いに悪事をなすことがないように。それでも多神教徒とは総出で戦え。連中もお前達と総出で戦うように。そして、神は敬虔な者たちの側にいることを知れ。（9章36節）

ナシーは不信仰を増し、不信者はそれ（ナシー）に迷わされている。ある年はそれをハラルとし、ある年はそれを神聖とする。彼らはアッラーが神聖とした数に調節し、アッラーが神聖としたものをハラルとする。彼らの行いの悪も彼らには美しく見える。アッラーは不信仰の民を導かれな⁽²¹⁾い。（9章37節）

この啓示はA.H.10年ズー・ルヒッジャ月に預言者が生涯最後の巡礼（別離⁽²²⁾の巡礼）を行った際に人々に与えられたとされ、コーランでナシーに言及するのはこの37節の一箇所のみである。36節については、「人々よ、この世は回っている。アッラーの天地創造の日の姿のままで。アッラーのもとでの月の数は12ヶ月である。その中で4つが神聖である。最初がラジャブ・ムダルでジュマダーとシャバーンの間、そしてズー・ルカアダ、ズー・ルヒッジャ、アルムハッ⁽²³⁾ラムである」という預言者自身の言葉も残っている。ラジャブ月についてはジュマダーとシャバーンの間のムダルのラジャブとことわっているように、半島のアラブにさほど周知されていない行事であったようだ。37節からは、ジャーヒリーヤ時代にはかなり恣意的に神聖月が変更されていたように推測される。前章において、ナシーについては閏の挿入を前提に述べてきたが、実は、初期の史料が伝えるナシーの権限については、このコーランの啓示の解釈の仕方によって、大きく分けて2つに分類される。1つは神聖月の延期についての決定であり、2つめが閏月の挿入である。ある月をナシーする、つまり、ずらし、延期するという決定は、神聖月を後の月にずらすことであるという解釈と、閏月の挿入により各月をずらすことであるというふたつの解釈が存在するので

ある。問題を複雑にしているのは、閏月を挿入した場合、当然のことながら、それに伴い閏月を含め、神聖月をどう設定するかの問題が起こることである。

マスウーディーには、「かつて、ジャーヒリーヤ時代のアラブは3年ごとにひと月を挿入し (takbisu)，それをナシーと呼んでいた。それは、延期すること (al-ta'khīr) である。アッラーは、『ナシーは不信仰を増し』という啓示でナシーを非難した⁽²⁴⁾」，「ジャーヒリーヤ時代のアラブは太陽暦と太陰暦の間に期間・時間の差があるために、ナシーを行っていた。これへの啓示が『ナシーは不信仰を増し』である⁽²⁵⁾」とある。ビールーニーによれば、かつてアラブはイスラム教徒同様の暦を用いていたが、作物・商品を市場に出すのに都合のよい時期に巡礼を実施するため、閏のシステムを導入したと説明する⁽²⁶⁾。

アズラキーを引用すると、「かつて、ジャーヒリーヤ時代の人々は、アルムハッラムをサファル・アルアウワルと、サファルをサファル・アルアーヒルと名づけ、これをふたつのサファルと呼んでいた。そして、(残りの月に対しては) ラビーウのふたつの月、ふたつのジュマーダー、……ズー・ルヒッジャと呼んでいた。そして、ある年はナシーを実施し、ある年は放棄し、神聖な月々をハラールとし、神聖でない月々を神聖にしていた。これはサタンの仕業であり、それを彼らのスンナとし、それを善いものと思い込んでいた。そして、ナシーを行う年が来ると、彼はカーバの広場に立って、フトバ (演説) を行った。人々が出立の日に彼のもとに集まると、彼は『私は、この年、ナシーを行った。サファル・アルアウワルはアルムハッラムである』と宣言した。それで、人々はその月は数えないこととし、(侵略の) 準備をすることはなかった。それから、彼らは (もうひとつの) サファルとラビーウ・アルアウワルをふたつのサファルと呼び、ラビーウ・アルアーヒルとジュマーダー・アルウーラーをラビーウのふたつの月と呼び、……ズー・ルヒッジャをズー・ルカアダと呼び、サファル・アウワル、それは彼がナシーをした (次の年に延期した) アルムハッラムのことであるが、をズー・ルヒッジャと呼んだ。そして、この年はアルムハッラムに巡礼した。その年からは、月をナシーすることはなかった⁽²⁷⁾」とある。この史料は分かりにくい表現が多いものの、ジャーヒリーヤ時代の暦のあり方を最も分かりやすく説明していると思われる。イスラム期と異なって、平年において、サファルがふたつあったこと (アルムハッラムはない)、ナシーによって年初に閏月のアルムハッラムを入れ、その月は神聖月とみなされたこと、それにより、

月が平年とは一月ずつずれていく（遅れていく）ことを説明している。巡礼者にとって、翌年の巡礼は12ヵ月後に行われるのか、あるいは閏月が入った結果、13ヵ月後に行われるのかは最も重要な情報である。彼らが帰路につく前に、ミナーの谷、あるいはカーバでナシーの決定は行われ、ズー・ルヒッジャの直後に閏月は入れられたと考えられる。

タバリーのタフシールで閏月に言及したと思われる伝承を拾っていくと、まず、「アルムハッラムは無視し、それに言及せず、……シャアバーンをラマダーンと呼び、ラマダーンをシャッワールと呼び、……」とあるのは、アズラキーとは逆に、閏月のアルムハッラムを削ることにより、暦がずれて、前年（閏年）とは逆に早まっていくという理解が背景にある伝承と思われる。⁽²⁸⁾「彼らは年を13ヵ月にしていた。それから、アルムハッラムをサファルにした。そして、その時、神聖なものをハラールとした」⁽²⁹⁾とある伝承は、文中のそれからを、次の年には、と解釈することで、閏月のアルムハッラムを平年のサファルに変えたと考えられよう。

「彼らは2年間、ズー・ルヒッジャ月に巡礼し、2年間アルムハッラムに巡礼し、2年間サファルに巡礼した。つまり、彼らは3年目ごとに翌月にまわす形で巡礼していた。そして、アブー・バクルは2年の内のひとつにおいてズー・ルカアダ月に巡礼した、預言者がスンナに基づいて巡礼する前に。そして預言者は次の年、ズー・ルヒッジャ月に巡礼した」という伝承は注意を要する。ここでは、3年目に閏月をいれるために暦が12ヵ月からなる純粋な太陰暦からずれていく背景を示しているのではなく、純粋な太陰暦にあっては、毎年月と季節がずれていくため、ジャーヒリーヤ時代には、巡礼儀式そのものを3年おきに次の月にずらして季節にあわせていたことを説明せんとしたものと解される。これはA.H.10年の別離の巡礼以前の2年間、ズー・ルカアダ月に巡礼していた史実から導かれ、預言者の別離の巡礼は、ハッジがズー・ルヒッジャにあたるという本来のサイクルに戻った際に行われたとする説明であるが、⁽³⁰⁾巡礼がいろいろな月にあたることにより、当然神聖月もその前後に設定されねばならず、後に述べるその他の伝承とも整合性はなくなる。

ここまでは、主に閏についての伝承を見てきたが、実際のところ、タバリーをはじめとするコーラン解釈書にある伝承は、閏による月のずれ、延期ではなく、神聖月を別の月、年に延期することについての伝承が多い。あたかも、閏

月はなかったかのような内容も見受けられるのである。複雑な議論になるが、次の章で述べるように、実際、非常時には神聖月の延期などの措置がとられた可能性があるのである。イブン・イスハークは、「ニサーアとはジャーヒリーヤ時代のアラブに対し、月々をナシーしていた（延期ないしは調整していた）人々のことである。神聖な月のひとつをハラールとし、そのかわりにハラールの月のひとつを神聖な月とした。そして、その月を遅らせていた。（中略）アラブはハッジを終えると、彼のもとに集まり、彼は4つの神聖月ラジャブ、ズー・ルカアダ、ズー・ルヒッジャ、アルムハッラムを神聖とした。もし彼がその中からハラールにしようと欲すれば、彼はアルムハッラムをハラールとし、それで、彼らはそれをハラールとした。彼はその代わりにサファルを神聖とし⁽³¹⁾、彼らもそれを神聖とした。神聖な4つの月に一致させるために」と伝えている。この記述ではナシーがほとんど神聖月の延期についてのみ関連付けられ、あたかも、ジャーヒリーヤ時代には、閏の挿入がなかったかのごとくである。ここでは、その月を遅らせていたという記述は神聖月の延期のことを言わんとしていると思われる。あるいは、コーラン9-37の「ある年はそれを（その月を）ハラールとし、ある年はそれを神聖とする。彼らはアッラーが神聖とした数に調節し、アッラーが神聖としたものをハラールとする」という文言の単なる解釈に終わっているとも推測される。タバリーの「ある年はムハッラムを神聖とし、ある年はサファルを神聖とする。そして、サファルを増加する。そして彼らは月々を延期し（yu'akhhirūna）⁽³²⁾、サファルをムハッラムにするに至る」などの伝承も似かよっている。「サファルを増加する」はコーランの「不信仰を増し」に対応するが、サファルがふた月あったことを意味するようでもある。また、「月々を延期し……」が閏か神聖月のことか考えさせられる。閏については、特定の伝承者には時代と共に忘れられていた、あるいは伝承者が意図的に閏の言及を避けていたという見解もあるが、⁽³³⁾伝承経路を経るうちに閏と神聖月の延期についてある種の混乱が生じているというのが実情のようである。

III. ジャーヒリーヤ時代の月名と神聖月の移動の可能性

以下は、これまでの伝承から可能性として想像されうる、ジャーヒリーヤ時代の年末、年初の月名である。

平 年

ズー・ルヒッジャ（巡礼・神聖月）
 サファル I（神聖月）
 サファル II

閏 年

ズー・ルヒッジャ（巡礼・神聖月）
 アルムハッラム（神聖月）
 サファル I
 サファル II

これはコーランの「彼らはアッラーが神聖とした数に調節し」という文言から、神聖月を毎年4つに設定していたと考える場合である。タバリーには、「ある年はムハッラムを見捨て、ある年はそれを神聖とする」⁽³⁴⁾、「かつてマウシムで彼らのカーイムが立った。そして言った。もしお前たちの神々がこの年にムハッラムを神聖とするのなら、そしてその年はムハッラムを神聖とした。そして次の年には言った。お前たちの神々がサファルを神聖とするのなら。そしてその年はサファルを神聖とした。ふたつ（のサファル）については、サフランと⁽³⁵⁾呼ばれている」、「キナーナ族のある男が言った。『……われわれはアルムハッラムを神聖とし、そしてサファルを延期した akhkharnā』。そして次の年が来ると今の言葉と同じように『われわれはサファルを神聖とした。そしてアルムハッラムを延期した』⁽³⁶⁾と言う」などの伝承があり、サファルを神聖にするという内容が頻出することから、平年のサファル I を神聖にして、閏年と神閏月の数を同じにしていたと思われる。なぜ、ズー・ルヒッジャが終わった後も、神聖月を設定せねばならなかったのかについては、メッカ周辺には、ウカーズ（ズー・ルカアダに開催）の反対方向にも、ジッダの偶像サアドや、メッカの北方海岸部にあった偶像マナート、バドル（マウシム、つまり、巡礼地であった）の偶像スワーなどが存在し、⁽³⁷⁾メッカ周辺の行事の後にも引き続き、巡礼が継続されていた可能性があるからである。ハイバルには、アルムハッラムに開催されるスークが存在していた。⁽³⁸⁾神聖月を守らせることは、巡礼・交易システムを維持するために欠かせないことであった。

A. Moberg はタバリーの伝承を詳細に分析し、アルムハッラムを、「神聖にされた」を意味する受動分詞から、サファル I（場合によってはサファル II）の別名に転化したものであるとする。これは、いくつかの伝承において、純粋に神聖月について説明し、閏については無視されているものと彼が判断した内容にあって、年初のふた月を表わす月名にアルムハッラムとふたつのサファルが出てくることから、練り上げられた説である。閏が入れられたのは確実である

ものの、その月名は不明とし、それを [X] とする。⁽³⁹⁾

Moberg 説

平 年	閏 年
ズー・ルヒッジャ	ズー・ルヒッジャ
アルムハッラム	[X]
サファル	サファル (I またはアルムハッラム)
	サファル (II)

筆者はこの説には同意できない。サファルをハラーム・神聖にするという記述はあっても、アルムハッラムに変えるという記述はない。アルムハッラムとサファルはあくまでも別の月名である。また、彼は、閏月は神聖月ではありえないとするが、これも実際は逆で、閏月のアルムハッラムが神聖であるからこそ本来神聖ではないサファルも平年においては神聖とする調整が行われたのである、これが、コーランの非難につながるのである。

また、M.Plessner は、A.Moberg の議論に影響されつつ、アルムハッラムをサファルの別称とし（ふたつのサファルをアルムハッラムとサファルのこととする）、閏月は神聖月ではないため、そこにサファルを置き、順次月をずらすという説を出している。⁽⁴⁰⁾

Plessner 説

平 年	閏 年
ズー・ルヒッジャ	ズー・ルヒッジャ
アルムハッラム	サファル
サファル	アルムハッラム
	サファル

両者の説に言えることであるが、平年と閏年とで、月の並びが混乱を生じており、当時の人々が、この月の配置になじんだのかという素朴な疑問が生ずる。ナシーにとってまず大事な点は、翌年のハッジを12ヵ月後に行なうか（平年）、13ヵ月後に行なうか（閏年）の決定である。アルムハッラムを置くと宣言する事は、翌年の巡礼を13ヵ月後に行なう事を宣言する事に他ならない。また、両者の場合、ズー・ルヒッジャの直後に神聖月が来たり、あるいはひと月、間を空けて神聖月が来たりするのは不自然であり、神聖月の役割を等閑視している。

上に示した月の並びは、あくまでも平穩に巡礼・交易がなされていた場合の

モデルである。しかし、非常時にあっては、つまり、神聖月を守らない部族の攻撃があったり、部族間で抗争があって、巡礼が成り立たないような場合には、ナシー職が神聖月をずらすなどして、恣意的に暦を調整した可能性は否定できない。イブン・イスハークは先の引用に続いて「彼らが発見しようとする、彼は、彼らの中に立ち、『神よ、私は彼らのために、二つのサファルのひとつ、アッサファル・アルアウワルをハラルとしました。もうひとつは次の年にナシー(延期)しました』と伝える。アズラキーはより、具体的に、「タイイ族とハスアム族は神聖な月々に人々を襲ったので、神聖月において、両部族の血を流すのをハラルとしました」というナシー職の言葉を伝える。⁽⁴¹⁾何らかの調整が行なわれたのであろうか。初期のコーラン解釈学者のファッラーウが「キナーナ族の男で、マウシムの長が、『私には誤りもなく、罪もなく、この決定はくつがえらない』と言うと、人々は『その通り。我々に月をナシーしてください』と言い、さらに『われわれからアルムハッラムの神聖性を延期して、サファルに置き、アルムハッラムをハラルにしてください』と願う。それで彼はそのようにする」と伝えるのは、⁽⁴²⁾年初のふたつの月の間で神聖性 *hurma* が延期、移動される措置を説明しようとする。月名そのものが神聖であることを示すアルムハッラムをハラルにする措置が実際なされたのであろうか。タバリーの「ある人が、さあ、略奪に行こうと言うと、彼らは、アルムハッラムである、と言った。そこで彼は、『我らはこの年をナシーとしよう、そして、今年ふたつのサファル月にし、次の年はふたつのムハッラムと決めればよい』と言った。そして、そうなった。そして、次の年の場合、彼は言った。『アルムハッラムとともに神聖となったサファル月において、略奪はならない。これはふたつのムハッラムである。我々は(すでに)最初の年にアルムハッラム月をナシーした(延期した)。それで、これを決定するのである』」という伝承は、⁽⁴³⁾アルムハッラムが、翌年にずれた、つまり、閏年をずらしたと解釈するしかない。ふたつのムハッラムは定冠詞アルを除外しており、この場合は月名を表わす固有名詞でなく、アルムハッラムとサファルのことである。この伝承は平年においてふたつのサファル月をハラルとし(よって神聖月は3つ)、翌年は神聖月をふたつ続けることにより(よって神聖月は5つとなる)、コーランで非難された数のつじつま合わせをしていたとするものである。次のイブン・ハビーブもほぼ同様な措置を伝えている。「アラブは剣と槍に生きていたのであるが、3つの神聖な月

においては友好関係が義務付けられていた。アルカランマスの一人は巡礼の最後の日々に (ayyām al-tashrīq), (カーバの) 石のところで、(暦について) 判断を下した。彼だけがこの責にあった。そして、彼らの一人がカーバの門に立ち、もう一人が石のところに立って、それぞれが『私は誤りもなく、罪もなく、この決定はくつがえらない』と言っていた。アルムハッラムに侵略したい人々がやって来て、アルムハッラムを延期することを求めると、彼は彼らに考慮し『今年はサファル・アルアウワルである』⁽⁴⁴⁾と言った。これも、アルムハッラムを単に翌月(あるいは翌々月)に廻すということではなく、閏月のアルムハッラムを入れず、さらにサファルをハラルにするを指すものとした方が理解しやすい。サファルが非神聖月であれば、この場合イブン・ハビーブの言う3つの神聖月(おそらく平年のラジャブ、ズー・ルカアダ、ズー・ルヒジャ)というのもつじつまがあうことになる。

平年のサファルの神聖性をずらすのはともかく、アルムハッラムの神聖性を除外したり、翌年にまわすなどは、実際あり得たのだろうか。上に挙げた伝承では、略奪の欲求、神聖月を守らないタイイ族、ハスアム族への復讐が理由とされている。神聖月にあってはアラブは父の殺害者にあっても平然としていたと言われるごとく、嚴重に守られていた。ヒジュラ暦2年、預言者の派遣した一隊がナフラにおいて神聖月のラジャブに交戦し、クライシュの男を殺害した⁽⁴⁵⁾事件にあっては、預言者はコーランの啓示で弁明せねばならなかった。ナフラはヒジャーズで最も有力な偶像ウッザーが置かれていた聖域であり、⁽⁴⁶⁾預言者は巡礼者が集まる神聖月の直前をねらって、一隊を派遣したと推測できる。このように、犯すべからざるタブーであるがゆえに、非常事態にあっては、神聖月の延期は存在したかもしれない。預言者ムハンマドも少年期に参加したと伝えられるフィジャールの戦いはスークが置かれたウカーズの近辺を舞台としたキナーナ族とハワージン(ターイフのサキーフ族の上位部族)の争いであり、クライシュは前者に荷担したことが知られている。ナシー職にあったキナーナ族がこの戦いの当事者であったことが興味深い⁽⁴⁷⁾。ナシー職に神聖月の延期をつめよるアラブがいたことは、いくつかの伝承で見たとおりである。また、この戦いの影響で、ウカーズのスークが開かれなかった年もあり、⁽⁴⁸⁾神聖月の設定自体が意味をなさない場合が実際にあったのかもしれない。また、キナーナ族と交戦したハワージン、スライム、ガタファーン族がナシーを行なっていたという

(49)
伝承もある。つまり、神聖月の延期は敵対部族の侵略や部族間紛争で巡礼が正常に行えないような場合、そして、敵対部族がキナーナ族の権限を無視してナシーを扱うような場合にのみ、例外的に適用されたのではなかろうか。フィジャールの戦いの際の強烈な記憶が、いくつかの伝承に残っていると推測されるのである。しかし、神聖月の調整がどのように行われたかについては、史料の内容も様々であり、確定は困難であるといえる。

ちなみに、神聖月はイスラム期以降、ジャーヒリーヤ時代とは異なる性格を持つようになる。ムスリム間の戦闘、異教徒へのジハードに関わる問題などでもなく、各神聖月に宗教的な意味合いにおける神聖性が付加されるようになるのである。

おわりに

ジャーヒリーヤ時代の暦についてはまだ重要な問題が残っている。閏月挿入の法則は単に3年に1度程度の単純なものであったのか、ユダヤ暦のカレンダーに従っていたとすれば、それはいつ頃からのことなのか、などである。また、A.H.10年に預言者ムハンマドがナシーを廃止したとすれば、それ以前のヒジュラ暦の10年間は閏が入った暦であったということになる。よって、事件の起こった月と季節の関係も見直さねばなくなる。預言者のヒジュラは秋頃でなく、真夏ではなかったのか、などである。これらの議論については、現在までも若干の論考はあるが、どの年が閏年であったかなどが根拠の少ないまま提示されており、この問題は長らく放置された形になっている。今後何らかの見解を提示したいと考えている。

注

- (1) 古代のユダヤ暦のあらまし、これへのバビロニア暦の影響等については、Birūnī, *The Chronology of Ancient Nations*, trans.C.E.Sachau, London, 1879, pp.62 ff.; *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, s.v. Calender; *Encyclopaedia Judaica*, s.v. Calender; フィネガン『聖書年代学』三笠宮崇仁訳、岩波書店、1972年、30-42頁参照。
ちなみに、13世紀以降、ユダヤ暦の新年は秋に移行した。
- (2) 1年365日の暦に、120年ごとに閏月を設ける、あるいは1年を360日とし、6年ごとに閏月を挿入するなどの調整を行っていた。より詳しくは Birūnī, pp.12-13, 38-39参照。
- (3) コプト暦、シリア暦、秋に行われたエルサレム巡礼（4世紀の聖墳墓教会建立に

- 起源を持つ)の様子などは, Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab (Prairies d'or)*, ed. C.B. de Meynard, 1917, vol.III, pp.399-411; E.Peters, *Jerusalem*, Princeton, 1985, pp. 140, 203-204参照。
- (4) Bīrūnī, p.71 には, まったく異なる月名が伝わっている。
- (5) Mas'ūdī, pp.417-419; J.Wellhausen, *Reste Arabischen Heidentums*, Berlin, 1897, pp.94-101; A.C.de Perceval, Sur le calendrier arabe avant l'islamisme, *Journal Asiatique*, 4-1, 1843, pp.342-45. 両者は,共に, 巡礼月は元来, 秋にあたっていたことを結論付けるが,特に後者は閏月を入れながらも200年にわたって暦がずれていったことを論じる。
- (6) ナシーを扱った専論に A.Moberg, an-Nasi' in der Islamischen Tradition, *Lunds Universitets Arsskrift*, N.F.Avd.1, Bd27, Nr1, Leipzig, 1931(以下, Moberg と略記。pp.5-9 にタバリーのタフシールの伝承の訳を載せる); *Encyclopaedia of Islam* (以下 *E.I.* と略記), s.v. Nasi', (A.Moberg の著述で, 新版も旧版と同内容) がある。他に A.C. de Perceval, *op.cit.*, pp.348-54.
- (7) A.Moberg によれば, ユダヤ暦の閏年 'ibbūr は妊婦 me'ubbarath と関連があり, また, 暦の決定の責任者でもあったサンヘドリンの長は同じく nāsī と呼ばれていた。また, アラビア語の nasiya (忘れる)と関連づける説もある。
- (8) ナシーのあらましを記した史料で代表的なものには, Ibn Ishāq, *Kitāb Sira Rasūl Allāh*, Göttingen, 1858-60, vol.I, p.30; al-Azraqī, *Akhbār Makka*, Leipzig, 1858, p.126; Ibn Ḥabīb, *al-Muḥabbar*, Beirut, pp.156-57; Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. III, p.417; Mas'ūdī, *Kitāb al-Tanbih wa'l-Ishrāf (Bibliotheca Geographorum Arabicorum* vol. VIII), 1967, pp.217-18; Bīrūnī, pp.13-14, 73 などがある。
- (9) Ibn al-Kalbī, *Jamharat al-Nasab*, Beirut, 1986, pp.164-65 によれば, 曾祖父のカラウが月々をナシーした最初で, 4年間職にあった。父のウマイヤが11年間で, 祖父のアウフについての情報がないが, 併せてもおおよそ100年に満たない期間となる。これについては, イブン・イスハークや, ナシーの期間を200年とするビールーニーと内容の相違がある。
- (10) al-Azraqī, pp.129-131.
- (11) Ibn Ishāq, pp.53, 55. 一方で, Ibn al-Kalbī, *Kitāb al-Aṣnām*, Cairo, 1914, p.22 によれば, ウッザーを管理していたのはスライム族。
- (12) 拙稿「ジャーヒリーヤ時代の偶像神と巡礼行事」『東京女学館短期大学紀要』第18輯, 1996年, 6-10頁参照。
- (13) Ibn Ishāq, pp.29-31. 同様な記述は Ibn al-Kalbī, *Kitāb al-Aṣnām*, pp.46-47.
- (14) ユダヤ・キリスト教徒のメッカ巡礼については, U.Rubin, The Great Pilgrimage of Muhammad: Some Notes on Sura IX, *Journal of Semitic Studies*, 27/2, 1982, pp.243-46. ハニーフがアブラハムの信仰と関わりがあった人々という見解は同じく U.Rubin の *Ḥanīfiyya and Ka'ba, Jerusalem Studies in Arabic and Islam*, 13, 1990,

pp.85-112 に詳説されている。

(15) Ibn al-Kalbī, *Kitāb al-Aṣṇām*, p.16.

(16) Ibn Ḥabīb, *al-Munammāq*, Beirut, 1985, p.70. イブン・イスハークによれば、カスアム族のヌファイルはアブラハと交戦して敗れた後、道案内を買ってでたという (p.31)。

(17) Ibn al-Kalbī, *Kitāb al-Aṣṇām*, p.44; al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa'l-Mulūk*, Leiden, 1964, Ser I, pp.1724-26 にハーリドのナジュラーン遠征と同部族の預言者への遣使の記述があるが、彼らのキリスト教との関連は述べられていない。

(18) Ibn al-Kalbī, *Kitāb al-Aṣṇām*, pp.35-36; Ibn Ishāq, pp.55-56; *E.I.* new ed., s.v. Dhu al-Khalasa. カスアム族は偶像破壊を目的とした預言者ムハンマドの遠征軍にも最後まで頑強に抵抗した。また、カスアム族はジャーヒリーヤ時代、アズド族を神聖月に度々略奪していたとも伝えられ (al-Ṭabarī, *Ta'rikh*, I, p.1731), 偶像が密集するこの地域の抗争は、ヒジャーズでのフィジヤールの戦いを想起させる。

(19) 前掲拙稿, 3-4頁。秋にあたるラジャブが神聖月とされ、ウムラが行われたことについては、アーシューラーの行事の存在から、ユダヤ教のヨム・キプール (大贖罪日) との関連が指摘されている。U.Rubin, *Great Pilgrimage*, p.245.

(20) al-Azraqī, p.127; Ibn Ḥabīb, *al-Muḥabbar*, p.319.

(21) 37節『……不信者はそれ (ナシー) に迷わされている……』の訳は, yuḍallu bihi alladhina kafarū と読み, 不信者を主語, yuḍallu は4形受身形とする場合。yuḍillu bihi と読んで, 不信者を目的語とし, 「神がそれで不信者を迷わす」という解釈 (クーフア) や, 「ナシーを扱う人がそれで不信者を迷わす」という解釈 (ハサン・アルバシリ), また, yaḍallu bihi と読んで「不信者がそれにおいて迷う」という解釈 (メディナ, バスラ, クーフア) もある。

(22) Ibn Ishāq, pp.968-69.

(23) al-Ṭabarī, *Jāmi' al-Bayān 'an Ta'wīl Āy al-Qur'ān*, Beirut, 1995, vol.X, p.161, no.12961 (イブン・ウマル→サダカ……から成る伝承)。ハッジの後半3日間の日, ミナーでのフトバ (説教)。

(24) Mas'ūdī, *Murūj*, III, p.417.

(25) Mas'ūdī, *Kitāb al-Tanbih*, p.218.

(26) Birūnī, p.73. また, ビールーニーは, 閏月は最初, アルムハッラムのところに置かれ, 次回はサファルの位置へと順次移動し, 12ヶ月の間を一巡していくという説を出しているが (p.73), 信憑性は少ない。

(27) al-Azraqī, p.126.

(28) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.170, no.12986 (ムジャーヒド→イブン・アビー・ヌジャイフと続く伝承。Moberg, p.7, VII). 同じ個所で「ズー・ルカアダをシャッワールと呼び, ズー・ルヒッジャをズー・ルカアダと呼び……」など, 暦を遅らせる記述もあり, 内容に混乱もある。

- (29) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.171, no.12987 (アブー・マーリク→フサインと続く伝承。Moberg, p.8, IX) .
- (30) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.170, no.12986 (ムジャーヒド→イブン・アビー・ヌジャイフと続く伝承。Moberg, p.7, VIII); Moberg, pp.46-47. アブー・バクルが A.H. 9 年にズー・ルカアダ月に巡礼したのは別の背景があった。この解釈が示すように、同月がその年には巡礼する月にあたっていたということではない。
- (31) Ibn Ishāq, p.30.
- (32) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, pp.169-70, no.12984 (ダッハーク→イブン・スライマーンと続く伝承。Moberg, p.6, V) . 「ある年はアルムハッラムを神聖とし, ある年はサファルを神聖とする。神聖な月々にサファル・アーヒルを加える」という al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.169, no.12981 (イブン・アッパース→父 (イブン・サアドの祖先) と続く伝承。Moberg, p.6, II) の伝承もほぼ同じ内容。
- (33) Moberg, pp.46-47.
- (34) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, pp.168-69, no.12980 (イブン・アッパース→アリーと続く伝承。Moberg, p.5, I) . 見捨てるとは閏を入れないということか。あるいは, タバリー自身が解釈するように伝承者が語根を *nasiya* とし, 忘れるの意にとったものか。
- (35) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.170, no.12985 (カターダ→サイドと続く伝承。Moberg, p.7, VI) .
- (36) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.169, no.12983 (ムジャーヒド→イドリースと続く伝承。Moberg, p.6, IV) . サファルを延期したとは, 次の月にずらしたということ, アルムハッラムを延期したとは, 翌年に, と解釈できる。
- (37) 前掲拙稿, 3-6頁。
- (38) Ibn Ḥabīb, *al-Muḥabbar*, p.268. ナターと呼ばれるスーク。
- (39) Moberg, pp.13-15, 22. ラジャブがアルムハッラムと呼ばれたという例も挙げている。Wellhausen, op. cit., p.95 は閏月についての議論は避けているが, アルムハッラムを受動分詞とし, かつてはサファルであったとする。
- (40) *E.I.*, new ed., s.v. al-Muḥarram.
- (41) al-Azraqī, p.126.
- (42) al-Farrā', *Ma'āni al-Qur'ān*, Cairo, 1955, vol.I, p.436.
- (43) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.171, no.12988 (イブン・ザイド→イブン・ワハブと続く伝承。Moberg, p.8, X) . また, 巡礼において紛争が生じた場合などは, 閏の挿入も恣意的になされていたことをにおわす「ある年はアルムハッラムをサファルとし, 彼らは侵略し, 略奪し, 獲得する」というタバリーの伝承もある。al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.169, no.12982 (アブー・ワイル→マンスールと続く伝承。Moberg, p.6, III) . 同経路の伝承が Sufyān al-Thawrī, *Tafsīr*, Beirut, 1983, p.126 では「キナーナ族の男はしばしば, アルムハッラムを延期し, それをサファルとする。それから, しばしばそれをアルムハッラムとする」となっている。

- (44) Ibn al-Ḥabīb, *al-Muḥabbar*, p.157.
- (45) Ibn Ishāq, pp.423-27; al-Ṭabarī, *Ta'rikh*, I, pp.1273-79; コーラン 2 章217節。
彼らはウムラの巡礼者であったとされる。この事件はジュマダー・アルアーヒラ月の最後の日であったという伝承もあり、新月の確認の有無が問題となったのかもしれない。
- (46) 偶像ウッザーがナフラにあったことについては, Ibn al-Kalbī, *Kitāb al-Aṣṇām*, pp.18, 24, 25; Ibn Ishāq, p.55.
- (47) この戦いは神聖月の干犯で知られるが, 実際には神聖月の干犯はハワージン側に一回あったのみである (E.Landau-Tasserón, *The Sinful Wars, Jerusalem Studies in Arabic and Islam*, 8, 1986, p.44)。
- (48) Ibn Ḥabīb, *al-Munammaq*, p.170.
- (49) al-Ṭabarī, *Jāmi'*, X, p.169, no.12981 (イブン・アッバース→父 (イブン・サアドの祖先) と続く伝承。Moberg, p.6, II)。